

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第24集

2021（令和3）年3月

二松学舎大学

はしがき

この冊子は、学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、2020(令和2)年度に本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

目次

学位の種類等	学位番号	氏名	学位論文題目	頁
博士(文学)	甲第57号	鈴木 和大	中世前期説話文学の研究	1
博士(文学)	乙第14号	奈良場 勝	近世易学研究	10

博士学位論文審査報告

題 目： 中世前期説話文学の研究

氏 名： 鈴木 和大

論文審査委員： 主査 文学部教授 磯 水絵
副査 文学部特別招聘教授 長島 弘明
副査 文学部教授 小方 伴子
副査 文学部教授 五月女 肇志

論文内容の要旨

本論文は、日本中世(特に院政期から鎌倉期にかけて)に成った説話文学作品を取り上げ、その作品全体に関わる問題、および個々の説話が抱える問題について様々に考察し、関係を論ずるものである。三部から成り、第一部には編者不詳の世俗説話集『宇治拾遺物語』を、第二部には源頭兼による故実説話集『古事談』を、第三部には個々の説話を包含するその例として、『胡琴教録』、『教訓抄』という楽書を取り上げる。本論文の構成は以下の通りである。

目次

序

第一部 『宇治拾遺物語』の研究

第一章 序説

第二章 序文をめぐって

一 はじめに

二 研究史

三 序文の内容

1 『宇治大納言物語』と源隆国

2 南泉房と隆国

3 隆国聞書伝説

4 『宇治大納言物語』の内容

5 「侍従俊貞」

6 『宇治拾遺物語』の成立

四 序の解釈をめぐって—まとめに代えて—

第三章 『宇治拾遺物語』の伝承圏をめぐって—第七九話を中心に—

一 はじめに

二 僧の魚食説話をめぐって

三 『発心集』の魚食説話

四 第七九話の問題点

五 氷魚について

六 本話の伝承経路と『宇治拾遺』の伝承圏—まとめに代えて—

第四章 「樵夫歌事」考—第四〇話の「場」について—

一 はじめに

二 樵夫と山守

三 歌材としての樵夫の伝統

1 漢詩

2 和歌

四 第四十話の場—まとめに代えて—

第五章 樵夫と藤六一—第一四七話をめぐって—

一 はじめに

二 『藤六集』について

三 藤原輔相について

四 本話の事件年次

五 樵夫か藤六か—まとめに代えて—

第二部 『古事談』の研究

第一章 序 説

第二章 『今鏡』との関係について—直接関係説の否定—

一 はじめに

二 直接関係説の再検討 (一)

三 直接関係説の再検討 (二)

四 直接関係説の再検討 (三)

五 『古事談』の文体

六 『今鏡』の素材

七 おわりに

第三章 『江談抄』との関係についての一考察

一 はじめに

二 顕兼の用いた『江談抄』

1 共通話の所在と『江談抄』の諸本について

2 先行研究とその検討—『古事談』と前田家本『江談抄』—

三 『江談抄』以外の資料

四 『古事談』と神田本『江談抄』

五 おわりに

附 『宇治拾遺物語』との関係について

第四章 『古事談』と『富家語』—説話化の方法—

一 はじめに

二 『富家語』との比較

三 『古事談』の方法

四 異同から見えてくるもの—まとめに代えて—

第五章 智海説話と永心説話—『発心集』と『古事談』、『宇治拾遺物語』の交錯

一 はじめに—智海について—

二 『宇治拾遺物語』と『古事談』

三 『発心集』の永心説話

四 智海説話と永心説話

五 まとめ

付 章 『古事談』同話比較対照表

一 はじめに

二 『古事談』と『今鏡』の比較

三 『古事談』と『江談抄』の比較

四 『古事談』と『中外抄』の比較

五 『古事談』と『富家語』の比較

第三部 音楽説話の研究

第一章 序 説

第二章 『胡琴教録』中の玄上について

一 はじめに

二 玄上の伝承と記録

三 『胡琴教録』中の玄上

1 玄上を弾く時の用意と先例

2 「古キ人」が語る玄上とその故実

3 有安、玄上に絃を懸ける

4 玄上の絃

5 兼実の演奏記録

四 おわりに—『胡琴教録』の成立過程と有安の日記—

第三章 大大鼓の日形起源説話をめぐって—『教訓抄』巻第九より—

一 はじめに

二 本文上の問題—源隆国について—

三 太鼓の日形をめぐって

四 隆国の見た夢—竜宮と高陽院—

五 「治暦之比」の背景—平等院一切経会をめぐって—

1 高陽院と平等院—隆国と宇治—

2 平等院一切経会への階梯—「治暦之比」の動き—

六 おわりに—本話の淵源—

跋—今後の課題と展望—

初出一覧

参考文献一覧

(以上、400字詰原稿用紙925枚相当分)

相当分)

さて、本論文の序、及び各編（各章・節）の内容を略述すると、以下の通りである。

序

「院政期から鎌倉期にかけて、文学史上では、現在、「説話集」と呼ばれる類の書が陸続と成立した。その現象は、院政期から鎌倉期、広く中世文学史を特色づけている」とし、「説話集」の定義を、「神話・伝説・昔話・世間話・逸話・打聞話・思出話・歴史話・有職話・仏教話・詩歌話・芸能話・童話その他、種々の話を集録した書物、いわば「説話」を集成した書」として、以下論旨を展開する。そして、それは編まれる「場」、編纂目的、方針、意図的な配列等によって、作品としての性格が付与されるもの。編者が異なり、編纂方法が異なれば、各集の性格や特色は異なるものと規定して、そうした中世説話集、及び説話の性格や特色を明らかにすべく、既存の研究成果を踏まえ、発展的問題、未検討であった諸問題を考察するのが当該論文であると、本論文の執筆意図を明らかにする。

第一部 『宇治拾遺物語』の研究

『宇治拾遺物語』は、成立年代や編者、及び他の説話集との関係について等、基礎的な問題が未解明である。また、収録説話が多岐にわたり、説話自体が抱える問題も少なくない。そこで、第一章にその概説、諸本についてを略述し、第二章に「序文」について、それは、それ自体をひとつの説話として読むべきで、そこには説話享受者の疑問が付せられた構成になっているとする。

第三章では編者論に移るが、そこには、はじめから編者一人を比定しようとするのではなく、その伝承圏を見定めて編者像を絞っていく方法を取るべきであるとする。そして、その例に、第79話「或僧、人ノ許ニテ氷魚盗食タル事」を取り上げ、それは氷魚使に派遣された蔵人が都へもたらしたもので、彼らの話所等で語られた可能性があると指摘して、説話の伝承圏に迫る。

第四章では第40話「樵夫歌事」を取り上げ、樵夫の歌詠に疑問を呈する。そして、歌詠みの貴族の意識下に樵夫が存していたこと、本話が、貴族の御遊に淵源を持つ説話であった可能性を指摘する。なお、次章には、やはり樵夫が詠歌する第147話「樵夫小童、隠題歌読事」を取り上げ、樵夫の和歌が『藤原輔相歌集』にみられることから、それは輔相の詠歌であること、また、彼が「をこなる」者であり、それを生業としたらしいことを指摘して、この説話の背景にも殿上の御遊が想定されることを論じて、第四、五章で、和歌説話の伝承の一端を述べる。

第二部 『古事談』の研究

第一部に取り上げる『宇治拾遺』との関連から、同時代に成立した源顕兼の『古事談』を考察の対象とする。

『古事談』・『宇治拾遺』間には22の共通話が指摘され、両書は密接な関係にあるとされている。そこで、顕兼と『宇治拾遺』編者とは近い環境にあったとみられ、顕兼の文学的環境を考察することは、即ち『宇治拾遺』編者の追究に繋がるものとする。また、『古事談』は典拠を抄出することで知られ、記録性に富む。そこで、高い物語性を有する『宇治拾遺』と『古事談』は、密接な関係にありながら、性格は異なり、好対照をなすから、両書を取り上げることは、中世前期説話文学を捉える上で有効であるとし、各論に移る。

『古事談』中の説話には様々な文献が典拠として指摘されている。第二章では、その一つ、歴史物語の『今鏡』を取り上げて関係を問い直す。稿者は従来言われている直接関係を否定し、それを証明する。そして、『古事談』説話の典拠の比定にはより慎重な検討が必要であり、その典拠の多くが散逸文献である可能性があるとする。

その可能性を検討するために、第三章では『古事談』と大江匡房の言談録『江談抄』との関係を取りあげる。両者の関係は、従来、直接関係とされ、『江談抄』諸本のうち、古本系に属する前田家本『江談抄』がもっとも近い関係にあると指摘されてきた。しかし、稿者の再調査の結果では、『江談抄』に共通する話の中には、前田家本のそれとは同文性の低い話や、異なる伝承話が確認できる話もあることから、すべてが前田家本『江談抄』を出典としているわけではないことを指摘する。そして、その具体例として、『宇治拾遺』にもみられる、伴善男の夢説話を取り上げて論じ、それが、古本系『江談抄』中の神田本にしかみられず、『古事談』が参照した『江談抄』に、それが載っていたかどうかは疑問であることを指摘する。また、その指摘から転じて、

『宇治拾遺』と『古事談』の直接的な書承関係にも、再検討の余地があることを述べる。

第四章では、『古事談』の説話化の方法を、藤原忠実の言談録『富家語』を比較対象として考察する。その結果は、『古事談』の説話化の基本方針は、原典をほぼそのままに抄出するものであることが指摘でき、さらに、必要に応じて語句を補い、言談の構成を変えながら抄出していることを解説する。そして、そうした異同に注目し、分析することで、顕兼の編纂意図に迫ることができる可能性を指摘する。

第五章では、第一部と同様に、『古事談』に収められた個々の説話が抱える問題について、考察を加える。『古事談』第三「僧行」第81話を取り上げ、同話関係にある『宇治拾遺』、及び類話関係にある鴨長明撰『発心集』との交点を探る。なお、ここでは、これまでの『発心集』研究においては伝未詳とされてきた僧永心について再調査を試み、彼が12世紀末から13世紀にかけて比叡山に存した者であることを新たに指摘する。

なお、第二部末尾には、『古事談』と同じ話を収める『今鏡』『江談抄』『中外抄』『富家語』との、同話比較対照表を付す。

第三部 音楽説話の研究

ここまで、『宇治拾遺』、『古事談』という、「説話集」を考察の対象としてきたが、説話は、そうした説話集のみに見られるものではないとして、第三部では、その例に中世前期に成立した楽書、編者未詳の『胡琴教録』、狛近真編著『教訓抄』を取り上げ、そこにみられる説話を考察する。

第一章では、両書の概要を示し、第二章で、『胡琴教録』にみえる玄上説話について考察する。『胡琴教録』は、鴨長明の琵琶の師中原有安の教えを弟子が記録した楽書で、中に琵琶の名器玄上にまつわる言談がある。稿者はその玄上説話を取り上げ、『胡琴教録』がもっとも具体的に玄上の扱い方を述べていることを指摘し、その具体的かつ詳細な叙述は、『胡琴教録』の編纂資料として、有安の日記を用いた可能性に言及する。

第二章では、興福寺所属の楽人狛近真の『教訓抄』を取り上げ、源隆国に関する説話について考察する。彼は、第一部で取り上げた『宇治拾遺』の母胎とされる散逸『宇治大納言物語』の編者である。そこで、楽書『教訓抄』に見られるそれに注目し、検討を加えて、その説話の背景に、隆国と関係の深い、「宇治」という土地が存することを述べ、さらに、この説話は、舞楽用の大太鼓の装飾の起源説話として読める一方、「宇治」という土地との関連から、平等院一切経会との関連に端を発した説話であることを指摘する。

第三部では、ここまで述べてきたように、『胡琴教録』、『教訓抄』と、中世に成立した二つの楽書にみられる説話を取り上げ、この時代の説話が、単に説話集所収の

ものだけに留まるものではないことを指摘する。また、このことによって、本論文が対象とする中世前期の説話を、より広い視野のもとに引き出すことができた指摘できる。

跋—今後の課題と展望—

本論文では、三部にわたって、中世に成立した説話集および説話について考察を加えてきたが、各部において取り上げた作品、それらすべてに対して、作品全体にかかる問題に触れ、若干ではあるが、新たな見解を示すことができた。また、個々の説話が抱える問題についても、先行研究を踏まえながら、独自の解釈を加えることができたと考える。

しかし、『宇治拾遺』の序文の問題、また、源隆国、延いては散佚『宇治大納言物語』の研究に十分な筆を割くことはできなかつたとし。今後はさらにそれらについて考究していくとして筆を擱く。

論文審査の結果の要旨

中世前期の説話集として『宇治拾遺物語』は、夙にその文学性の高さを謳われる作品であるが、いまだにその編者、成立年等は明らかにされていない。そこで、その研究方法は、自ずと他説話集を規矩として行われてきた。その点においては、本論文もその例に漏れない。しかし、特筆すべきはその研究姿勢で、先行説を改めて再調査する態度は誠実である。地味な営為であるが、そこに先行説の陥穽への気づきが生まれる。第二部第二章の『今鏡』と『古事談』との関係についての論は、まさにそこに生れたもので、従来論を鵜呑みにしては難しい。和文脈の『今鏡』が、主に漢文脈の貴族日記や言談録を抄出して構成される『古事談』説話の集成の中に混入することを奇異だとし、『今鏡』を『古事談』の直接典拠だとする通説に疑問を抱くことができたのも、稿者が、国文・漢文の並修を学是とする本学で学んだ大きな成果だと思われる。本論文には、そうした卓抜な洞察の上に、第二部付章に見られるような緻密な同話比較を実施する検証が行われていることを特記しておきたい。

そうした誠実な研究姿勢は、目次を通覧するだけでも理解され、構成には無理がない。しかし、その構成は構成として、その流れを途切らせることなく、この通りに論を展開していくことは至難である。その点において、各編の序説が新たに加えられたことは本論文を理解しやすくしている。そして、その内容は、以下に示すように、すでに学内学会だけではなく、中世・説話・仏教文学会等ですでに口頭発表、あるいは雑誌掲載が認められており、継続的に研究が行われていることも評価に値し、これまでの甲種学位請求者にこれだけの本数は例を見ない。

1 「樵夫歌事」考——『宇治拾遺物語』第四十話の場について——

『二松学舎大学人文論叢』第96輯 2016年3

月

- 2 智海説話と永心説話について——『宇治拾遺物語』、『古事談』と『発心集』との交錯——

『二松学舎大学人文論叢』第99輯 2017年10

月

- 3 樵夫は詠者になり得るか——『宇治拾遺物語』第一四七話の詠者をめぐって——

中世文学会平成30年度大会研究発表会（2018年10月14日）口頭

発表

- 4 『古事談』の方法——『富家語』を手がかりとして——

二松学舎大学人文学会第119回大会（2019年7月13日）口頭

発表

- 5 『古事談』と『今鏡』の関係について——直接関係説の否定——

『説話文学研究』第55号 2020年

9月

- 6 『古事談』と『江談抄』の関係についての一考察

『二松学舎大学人文論叢』第105輯 2020年

10月

- 7 『胡琴教録』中の玄上について

『仏教文学研究』第46号 2021年7月日掲載

予定

- 8 源隆国の見た夢——『教訓抄』巻第九より——

『興福寺に鳴り響いた音楽——教訓抄の世界——』

二松学舎大学学術叢書 思文閣出版 2021年3月31日刊行予定

以上

また、本論文において特筆されるのは、視座が多角的であることで、取り上げている説話の話材は、いわゆる詩歌管絃の全領域に及び、さらには説話の内容のみならず、その文体にまで注意が及んでいる。第一部においては詩歌が俎上にあがるが、古典教養として樵夫に和歌が詠めるか、はたまた、それが貴族殿上人の話題となるかという命題（問い）は、軽々には結論が出ないものの、説話の生まれる場と、説話の伝承の過程を考える上で、この問いは不可欠である。また、第二部では、漢文脈の説話集と言談集、漢文訓読調の説話と和文脈の歴史物語という文体論的な視点を始発として、『古事談』と歴史物語『今鏡』の関係の再考に及ぶ。そして、他の説話研究には現れない視座が見出せるのは第三部である。楽書を扱っているから新しいというのではなく、論述に当たり、常に文化や儀式、それを行っていく貴族殿上人を、一体のものとして意識しているところがきわめて新しく、高い評価に値する。

以上のように、本論文には、原『江談』と現『江談抄』の関係など、今後さらに検

討すべき課題もないわけではないが、『宇治拾遺物語』と『古事談』を中心とした中世前期説話文学の研究としてはきわめて大きな成果を上げており、特に『今鏡』と『古事談』の関係については、従來說を大きく正している点は評価に値する。

よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士（文学）」（甲）の学位を授与するに値するものであると認定する。

博士学位論文審査報告

題	目：	近世易学研究
氏	名：	奈良場 勝
論文委員：	主査	教授 町 泉寿郎
	副査	教授 田中 正樹
	副査	特別招聘教授 長島 弘明
	副査	京都大学人文科学研究所 名誉教授 武田 時昌

主論文『近世易学研究—江戸時代の易占—』 おうふう 2010年

副論文「江戸時代の易占書の特質」(『新陰陽道叢書』第三巻「近世」所収) 名著出版 2021年刊行予定

論文内容の要旨

本論文は、江戸時代の易占について、各種易占書とその著者・出版者に関して、主に書誌学的検討に力を注ぎつつ概括的に捉えた論文である。各種文献の成立・内容を比較検討することで易占の系譜を整理しつつ、特徴的な占術内容について記述している。

主論文の構成は以下の通りである。

目次

総論——即時占について——

- 1 京房易の概念と枠組
- 2 断易について
- 3 馬場信武とかな書きの易占書

- 4 八卦占法
- 5 江戸時代中期の易占書
- 6 『易学小筮』以降の易占書

第一部 人物編

新井白蛾

- 1 梅花心易と白蛾の易
- 2 白蛾批判
- 3 古易館初期の門人たち
- 4 『易学小筮』
- 5 『易学小筮』重板紛議
- 6 『易学小筮』出版に至るまで
- 7 平澤随貞と白蛾の易

平澤随貞と松宮観山

- 1 平澤随貞
- 2 松宮観山
- 3 『卜筮経験』に見る平澤流卜筮術の特徴
- 4 平澤流の筮法の変更
- 5 『卜筮霊狐伝』に見える観山の思想
- 6 観山の著作に見える易思想
- 7 『卜筮盲筮』と『増補卜筮盲筮』
- 8 『増補卜筮盲筮』の版元の変更
- 9 『増補卜筮盲筮』の校訂・増補部分
- 10 『日月卦伝鈔』前編・後編の形式

第二部 易占編

明代占卜書の受容

- 1 『毛利家文書』と『卜筮元亀』
- 2 『火珠林』
- 3 『梅花心易』
- 4 『断易天機』
- 5 陰陽道と『断易天機』

「八卦」の版本と占法

- 1 八卦の版本

- 2 八卦の基本的概念
- 3 八卦の占法

「古暦」の版本と占法

- 1 『古暦』の版本
- 2 『古暦便覧』の版本
- 3 『古暦便覧』以降の版本
- 4 「古暦」による占法
- 5 「古暦」と「命期」

主論文の総論、及び第一部・第二部の概要は以下の通りである。

総論——即時占について——

本論文の考察対象が、経部易類とは別の子部術数類占卜属に配当される文献であることを明示し、江戸時代において経書としての周易関係の文献と易占が依拠した文献との間に差異があることを述べる。次いで、漢代易学を大成した京房『京氏易伝』に遡って、易占の基本概念（五行と八卦、納甲、世応、飛伏、六親）について説き、続いて元・明代の「断易」と称する文献について概観する。明末の「断易」文献には別々に存在していた複数の占法が混入しているが、概観すれば明・清の「断易」の中心理論は五行の生尅であること、また明にはあった即時占の要素は清に継承されなかったことを論じている。

江戸期の易書に影響を与えた文献として、『断易神書』『断易天機（和刻あり）』『断易心鏡』『通玄断易』を挙げ、それらは内容的にみると①「断易」の基礎知識、②六十四卦占、③家宅や病気などの各種占の三つの要素からなっていること、そのうち近世日本の易占に最も影響を与えたのは②六十四卦占の部分であったと論ずる。

上記の中国における易占書の概説を受けて、近世日本における易占書の概説に及び、馬場信武（生没未詳）の書籍、新井白蛾『易学小筌』以前の18世紀中葉の易占書、新井白蛾『易学小筌』以降の易占書について概説している。

第一部 人物編

新井白蛾

白蛾の古易の考え方に邵康節『梅花心易』の影響が見られることを認めつつも、白蛾が「象」を重視して五行生尅理論に否定的であるなど『梅花心易』との差異も見られることを論ずる。白蛾の易が多く支持を得てその学塾には町人層、儒医など多くの門人が入門したこと、しかしその一方で激しい批判にもさらされたことが説かれる。続いて、広く流布した白蛾の著書『易学小筌』について、その成立と出版をめぐる諸問題を論ずる。白蛾の『易学小筌』以

前に、平澤随貞は『断易天機』をベースに既に機能的な易占書を作り上げており、白蛾には平澤の易理論に依拠しつつも「周易」に近づこうとする姿勢があり、白蛾の易占は平澤との比較によって明確になると論ずる。末尾に、新井白蛾の年譜が添えられている。

平澤随貞と松宮観山

平澤随貞の易占書が江戸中期の易占普及に大きく貢献したとの見通しに立ち、平澤随貞とその門人松宮観山の伝記から説き起こし、平澤の著書『卜筮経験』や『卜筮盲筮』によって平澤流卜筮法の特徴を明らかにしている。射覆（せきふ、占いによって見えないものを当てること）を得意とした平澤の易が『断易天機』や『梅花心易』に依拠したものであったのに対して、儒学・兵学・神道にも通じた松宮観山の易は五行生尅を頻用し、神道と易を結びつけるなどの点に特色があると論ずる。また、易占書の出版書肆をめぐって、白蛾の書籍を出版する書肆と平澤の書籍を出版する書肆の間に確執があったことにも言及している。

第二部 易占篇

明代占ト書

『卜筮元龜』『火珠林』『梅花心易』『断易天機』を取り上げて、明代占ト書が中世から近世の日本にどのように受容されたかを明らかにしている。

八卦の版本と占法

古暦の版本と占法

民間で広く使用された占いのテキストとして、八卦と古暦を取り上げて、それぞれの版本の種類と、それに基づいた占法を明らかにしている。

副論文の構成は以下の通りである。主論文のエッセンスに加えて、その後の研究成果を反映し、江戸時代の易占に関する概説としてよくまとまっている。

- 1 歴史資料に残る易占の実例
- 2 舶載された易占書
- 3 八卦占
- 4 古暦占
- 5 馬場信武の易占書とその影響

論文審査結果の要旨

主論文・副論文において奈良場勝氏は、いまだ詳細には解明されていない明代の「断易」文献を比較対照テキストとし、江戸時代の易占書について詳細な書誌学的調査を踏まえた上で内容分析をすることにより、その影響関係や日本独自の展開を論じ、江戸時代の「易占史」の俯瞰的見取り図を提示することに成功している。可能な限りの易占書を閲覧することにより、各論においてその書誌学的記録が具体的に挙げられており、当該分野を研究する際のまず参照すべき基礎的研究と位置付けられる。

本論文は、蓄積が多くない当該分野の研究においてさまざまな新しい知見を加えている。本論文によって、「断易」文献の理論的基礎には「漢易」（京房らの象数易）が用いられていたことが具体的に明らかになった。日本の知識人の間で広く読まれた易が王弼や程頤・朱熹らの注に基づく倫理的哲学的な「義理易」であったのに対し、象数易は『周易』を暦（干支）と関連付ける「納甲」「卦気」「八宮世応」説を説き、占卜としてより詳細な「時」（具体的な日時）を扱うことができた。易占書に関する先駆的研究とみなされる本論文は、象数易の日本における受容という点から見て重要な意義を持っている。

また、江戸時代の学術史の視点から見れば、多くの著作とその出版書肆が形成されることによって、易占が江戸時代学術において一分野として成立していたこと明らかにしたことも意義深い。新井白蛾が学術史上に占める位置を、「周易」に関する学問と実用的な易占とに二極化する江戸時代中期の状況において見定めようとする視点は、江戸時代易学研究の方向性を考えるうえで示唆に富む。

個別の論点に関する新知見としては、明代の易占書には見られ清代には継承されなかった「即時占」という点において江戸時代の易占書が特色を持っていることや、江戸時代易学の中心人物である新井白蛾、および平澤随貞らの伝記を明らかにしたことが挙げられる。また仏教の影響もあって発展した江戸時代特有の「八卦」という占法や、暦形式の「古暦」の占法の解明にも独創性が認められる。

この上は、奈良場勝氏が『近世易学研究—江戸時代の易占—』の成果をもとに研究を更に発展させる機会があれば、次の点にも配慮するよう望みたい。元・明代の易占書が日本中世にどのように受容されたか、時代を遡上させて考察すること。医学・儒学など他分野との関係にも配慮して易学を江戸時代学術史全体の中に位置づけること。どのように占われたかをより具体的に解明すること、などである。

既に、奈良場勝氏が開拓した易占書に関する研究は、当該分野・隣接分野の研究基盤としてその研究に影響を与えるものとなっていることを最後に申し添える。

よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士（文学）」（乙）の学位を授与するに値するものであると認定した。

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 24 集

2021 (令和 3)年 3 月 16 日

発行 二松学舎大学大学院

編集 二松学舎大学 教学事務部 教務課

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6 番地 16

電話 03 (3261) 7406